「信濃更科 田毎月 鏡臺山」はいかに成立したか

― 歌川広重の頭の中に分け入る ―

山岸　哲 ・ 玉城　司

2024

はじめに

「更科の月」は平安時代の『古今和歌集』(905 年序）に「わが心 なぐさめかねつ 更科や おばすて山に てる月を見て」と歌われて、つとに知られることになった。貞享 5 年（1688）には、この和歌にひかれた松尾芭蕉が姨捨を訪れ「おもかげや 姥ひとりなく 月の友」(『更級紀行』）と詠んだことから、「姨捨山」は後世の俳人たちの聖地（メッカ）となった。

ここに一枚の浮世絵「六十余州名所図会 信濃更科 田毎月 鏡臺山」がある（**表紙**)。浮世絵師・歌川広重が描いたもので、版元「越平（越村屋平助)」の勧めで、嘉永 6 年 8 月にこの浮世絵が出版されたという（岩波書店刊『広重　六十余州名所図会』の解説による)。

「田毎の月」は、永禄 7 年（1564）8 月 1 日に藤原輝虎（上杉謙信）が更科八幡宮に捧げた願文（がんもん）、天正 6 年（1578）作とされる狂言『木賊（とくさ）』で語られ、元和 8 年（1622）11 月 18 日の真田信之によるお通宛書状、それに上述の芭蕉の訪問などが先行する。

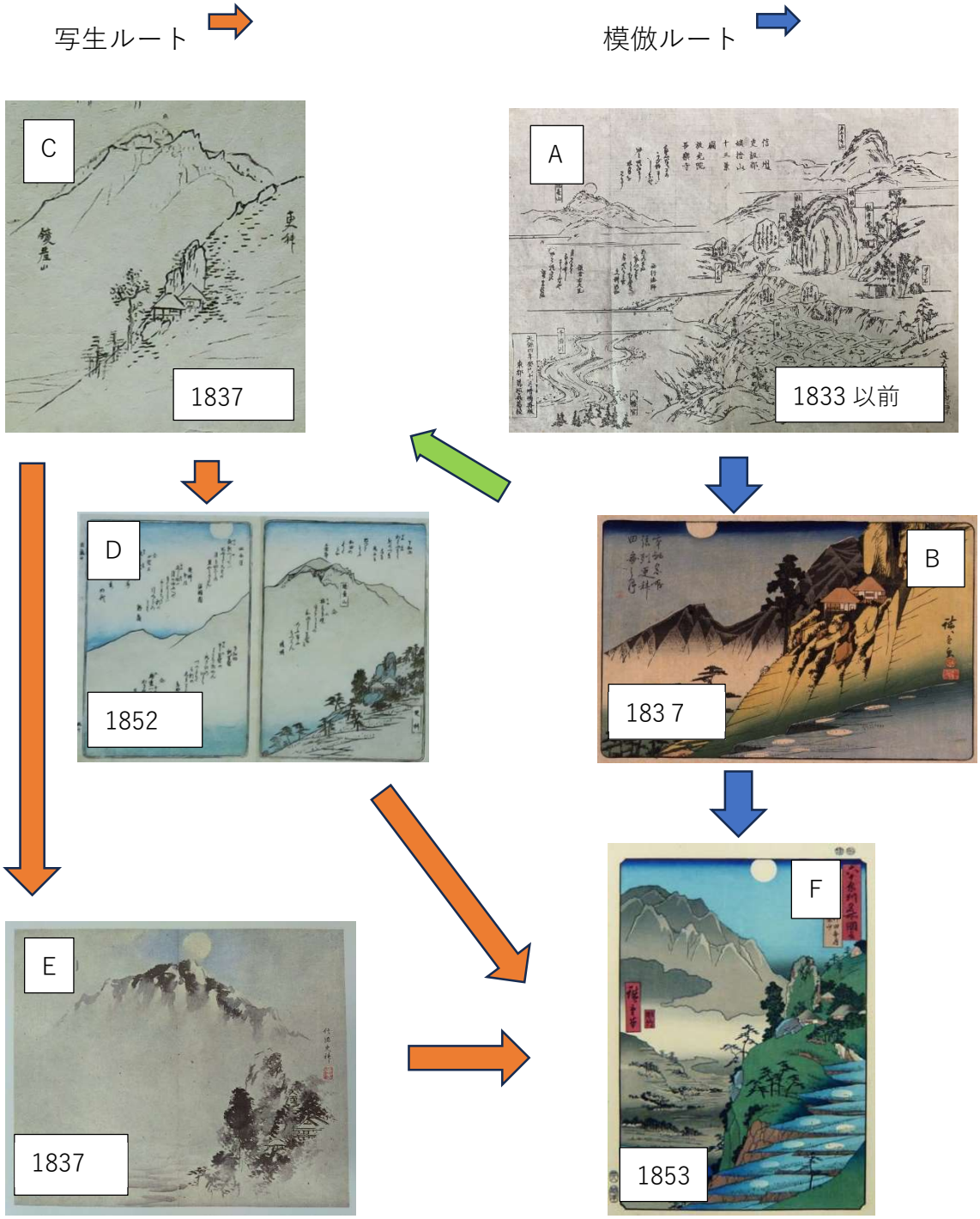
本論考は、広重のこの浮世絵がどのようにでき上がったのか、「美術」とは無縁の二人がその成立過程を追い求めたものである。

1. 現在の更科姨捨周辺の風景と江戸期に描かれた風景の相違

江戸時代の「姨捨の月」や「田毎の月」を描いた絵図は、「冠着山（姨捨山)」(**写真 1 矢印 1**)、「姨石」(**同 2**)、「長楽寺」(**同 3**)、「四十八枚田（月夜田)」(**同 5**）が四点セットで描かれることが多い。当時「棚田」といえば、長楽寺の下に広がる「四十八枚田」であったからである。江戸期は、利水が十分整わなく、畑地に小水田がモザイク状に混在する状態だった「姪石・曽根棚田」(**同 4**）に比べ、長楽寺領として 48 枚も棚田がまとまっていたことに関心を抱いたからだろう。

あらかじめ結論を言えば、広重の「信濃更科田毎月鏡臺山」は、広重自身による写生と先行する刷り物を模倣した、二つのルートが融合して成立した浮世絵である。

(**写真 1**）姨捨地域の眺望（矢印 1 「冠着山」、同 2「姨石」、同 3「長楽寺」、同 4「姪石・曽根棚田」、同 5「四十八枚田」、同 6「鏡台山」)



（図 1）「信濃更科田毎月鏡臺山」に至る二つのルート

2. 田毎の月を描いた、広重の作品 （模倣ルートの検証）

図 1 は、「信濃更科田毎月鏡臺山」（**表紙・図 2-F**）に至る二つのルートを成立順（推定）によって整理したものである。**図 1-A** は、文友昇の絵による一枚刷りで「天保四年癸巳（1833）十一月増補再版東

都篤垣真葛校」の識語がある。これによって天保 4 年以前に出版されていたこと、篤垣真葛が校訂者であったことが判る。なお、この一枚刷りは売れ行きがよく、増補再版を重ねるうちに真葛自身が版元となった、と推察される（後掲の**付録図版 A** の解説参照）。

これ以前の絵図には、明和 3 年（1766）刊上州宮崎の富永柳旨ら著の『艸枕』の挿絵（建部綾足画）をはじめとして、同 6 年刊の加舎白雄編の芭蕉「面影塚」建碑記念集の挿絵（橘岷江画）がある。これらは俳書に収載されたもので、出版数は百部に満たない。一枚刷りでは、中村伯先が天明 7 年（1787）に出版した「信州姨捨山之圖」と「更級姨捨山古辞」が早い。これら俳書の挿絵や一枚刷りは姨石と姨捨山を中心に描く点に特徴があり、『更科記行』の芭蕉を追慕する情から生まれた図絵としてはふさわしいが、購入者も芭蕉を敬慕する俳諧愛好者に限られていたと考えられる。

「更級郡姨捨山十三景圖」（**図 1-A**）は、鏡台山を含めた更級郡姨捨山周辺全域に目配りし、田毎に月が描かれている点で俳書の挿絵や伯先の一枚刷りと大きく異なっている。長楽寺を中心とした「姨捨山十山景」を描くことによって、この地域一帯を名所として位置づけようとする意図があり、実際にその魅力を発信することになっただろう。購入者の飛躍的な拡大に繋がったことは想像に難くない。

「本朝名所信州更科田毎之月」(**図 1–B**) は、「更科」全体をテーマに描きながらも、鏡台山と田毎の月、姨石（観音堂・長楽寺）に焦点をしぼって描かれた最初の浮世絵である。

図 1–B は**図 1-A** の構図に応えるように、二峰が描かれ、見上げるアングルのためか姨石の下の長楽寺と観音堂の下方がかなり急勾配で崖のように描かれ、その下に「四十八枚田」と思われる水田に映る月が描き込まれている。長楽寺の下方が不自然に急勾配なのは、文友昇の絵が相当急勾配だったからであり、**図 1-A** を粉本とした可能性を否定できない。

さらに、重要なことを二つ指摘しておきたい。一つは、広重が背後に描いた二峰のうち左は「鏡台山」、右は「冠着山」であったと考えられることだ。文友昇は千曲川の東岸に「鏡臺山」を、「カムリキ山」を西岸に、千曲川をはさむことによって、位置関係をほぼ正確に描いている（**図 1-A、写真 1** 参照）。また、文友昇は遠く離れた両山を一枚の絵に収めるために、俯瞰の手法を取り入れている。これに対して実際に風景を見ていないまま描いた広重は千曲川で隔てられた両山を一続きの連峰として描いている点である。

もう一つは、この時すでに広重は月をすべての田んぼに映しているが、これは彼が本当にそう信じていたのか、デフォルメしたかは定かではないが、**図 1-A** が先行することを確認できることである。

図 1-A を出版した篤垣真葛は、天保 7 年に『狂歌鐘声百人一首』を出版し、その人物画を広重が描いていることから、二人には深い交流があったと推察できることも加えておきたい。増補再版するほど人気があった**図 1-A** の一枚刷りを参照して、**図 1-B** が出来上がったものと推測される。その制作年はボストン美術館のサイトによると天保 8 年（1837）だという（**付録図版 B** を参照）。

3. 広重の信濃への旅　（写生ルートの検証）

広重は、狂歌集『岐蘇名所図会』の挿絵を依頼されて 木曽路を旅した。依頼主は選者の梅廼屋鶴子（1802-1864）と檜園梅明（1793-1859）だっただろう。これ以前に広重が信濃を訪れたという記録は見当たらなく、江東区深川江戸資料館広報紙 88 号の「広重の旅④」によると、この旅は天保 8 年（1837）だったという（岩波書店刊『広重　六十余州名所図会』の解説では嘉永元年（1848））。

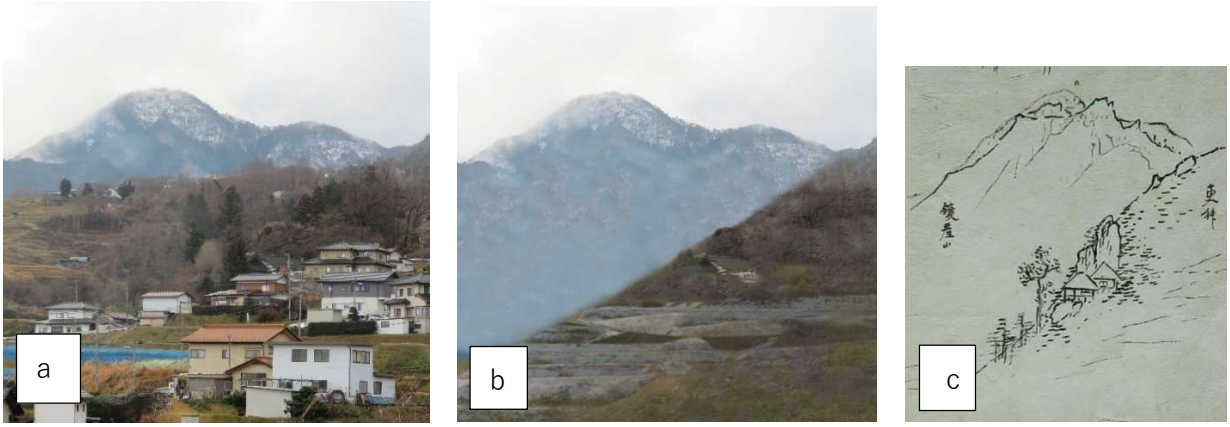
「広重のスケッチ」（**図 1-C**）は、この時のスケッチ帖の一部、で大英博物館に収蔵されている（『秘蔵

浮世絵大観』１所載)。スケッチ帖の同じページには善光寺本堂の素描、別のページには千曲川の渡しの風景などが見られることから、広重は木曽路から足を延ばして実際に更科の辺りを訪れたことがわかる。

広重のスケッチがなされた場所を特定すべく、長楽寺の周辺を探してみた。それはスケッチの構図（**図 1-C**）から考えて、**写真 2-a** を撮影した場所だと推定される。この辺りから彼はスケッチしたのだろう。そこで、彼が驚いたことは、彼が描きたかっただろう「名月の名所・鏡臺山」は長楽寺方向にはなく、そこには丸っこい「冠着山（姨捨山)」が見えるだけだったのである。

彼のスケッチを見ると、本来「冠着山」のあるべき位置に「鏡臺山」と添え書きされた山が描かれている。彼は「冠着山」と「鏡台山」を取り違えたのであろうか？　私たちはそうは思わない。理由は、目を凝らすとこの山塊は「ギザギザの山」と「丸っこい山」の二つが重なっていることが明瞭であるからだ。では、隠された山はどちらか？　それは間違いなく山頂の形から「冠着山」であろう。**写真 2-a** の稜線が二山あり、右側がやや低いことまでスケッチでは正確に写し取っていることがわかる（**図 1-C、付録図版 C**）。

彼は千曲川の東岸にあった「鏡台山」を思い切って「冠着山」にスッポリと重ねてしまったのである。彼がスケッチした場所から「冠着山」を眺めた時、気になったのは冠着山の前に広がる「姨石・曽根棚田のある尾根部」だっただろう。それはスケッチでは消し去られている。**写真 2-a** から、中景の「姨石・曽根棚田」と人家を消し去ったのが**写真 2-b** で、これは広重のスケッチ（**写真 2-c・付録図版 C**）そのものである。



（写真 2）　よみがえるスケッチの風景（a 現在の風景、b 当時の風景、c 広重のスケッチ）

広重の『六十余州名所図会』は、五畿七道の 68 ヶ国及び江戸からそれぞれ一枚ずつの名所絵 69 枚に目録一枚を加えた全 70 枚からなるものだが、これらは「飛騨　竹籠わたし」「上野　榛名山雪中」のように、各地の名所一箇所の風景を描くケースと、「出羽　最上川　月山遠望」「陸奥　松島風景 富山眺望之略図」のように二箇所を並列的に図像化するケースがある。「信濃　更科田毎月　鏡臺山」は、後者のケースにあたる。彼の中では、「信濃更科」といえば、「田毎の月」と「鏡臺山」であり、どうしても「鏡臺山」を描きたかったらしい。その理由は、古くから「田毎の月」で知られていた月の名所では、月を写す鏡の台（うてな）としての鏡台山が必要不可欠であると見たからではあるまいか。言葉遊びに過ぎないようだが、判じ絵が流行した江戸後期の人々にとって、謎解きをする喜びもあり、すでに、二つの山を連山として描

いていた広重にしてみれば（**図 1-B**）、二つの山を重ねてしまうことに抵抗がなかったのかもしれない。

広重は、スケッチ（**図 1-C**）に基づいて『岐蘇名所図会』の挿絵（**図 1-D**）と写生画（**図 1-E**）を描いた、と考えられる。（**図 1-C**）の画面右の中腹の堂宇は長楽寺と観音堂であり、その背後の大きな石は、姨石であろう。その下に広がるのは、「四十八枚田」らしいが、ここには田毎の月が描かれていない。注目すべきは、画面左の山に「鏡臺山」と書き入れていることである。

（**図 1-D**）は、（**図 1-C**）を横に広げただけで、まったく同じ構図である。しかし、鏡台山の上には月が描かれ、夜の風景と見るように仕向けられている。『岐蘇名所図会』の奥書によると、この狂歌集が刊行されたのは、嘉永 5 年（1852）か翌年である。

（**図 1-E**）の構図はスケッチ（**図 1-C**）とほぼ同じである。しかし、こちらは、「信濃更科」と記した下に落款があることからみて、完成した写生画とみるべきである。＊

写生画は、スケッチよりも姨石や長楽寺の堂宇や聖堂らしき建物や一帯の木々が鏡台山に迫り、山頂に満月が描かれている点に特徴がある。月の背後の空には薄い青が彩色されているほかは墨彩で、下方には山頂の月と対照的に棚田らしき水面が描かれている。この絵が描かれたのは、広重が信濃へ来たという天保 8 年（1837）か、それ以降の嘉永元年（1848）頃か、落款が読めていないことがあって、しぼりきれない。専門の方に教えていただきたい。

＊**写生画**（**図 1-E**）は、スケッチ帖（『秘蔵浮世絵大観』 1 、講談社、1987 刊）に収録するスケッチ（図 1-C）より早く『世界素描大系』「Ⅳ　東洋　スペイン　イギリス　アメリカ　現代」（講談社、1976 年刊）に紹介されていた。

4.「信濃更科田毎月　鏡臺山」（図 1-F）の完成　（写生と模倣ルートの融合）

本論考の最大の核心は、「広重は、写生であるにもかかわらず、なぜ鏡台山と冠着山を重ね、あのように巨大な山塊を創出したのか？」という問いに答えることにある。私たちは、広重の描いた絵の構図から彼の頭の中に分け入ろうと試みたのであるが、これについては広重の声をすでに聴いた研究者がいる。『歌川広重の声を聴く―風景への眼差しと願い―』（京大学術出版会、2018）を出版した阿部美香氏である。彼女は、広重晩年の『絵本江戸土産』に書き込まれた広重自身の言葉を分析し、広重の風景観に迫ったが、彼女によるとこういうことになる。

（広重の絵は）「描く対象が選択されている」。そのような「選択」的描写が意味するものは何なのか。それは、「この場所の風景といえば、これらの事物が存在するのだろうというイメージの充足に他ならない」と述べている。また別のところでは、「画面中央に日本画の伝統表現である雲が横たわり、描写物を選択したうえで対象をつなぎ距離を調整して富士山を実際よりも大きく配している。」（同書 64 頁）と記している。

いよいよ最後の段階である。広重が「姨捨の田毎月」を描くことになったのは、『六十余州名所図会』のうちの「信濃　更科田毎月 鏡臺山（**図 1-F・表紙**）を依頼されたときだった。広重は迷うことなく、自身の前作「本朝名所信州更科田毎之月」（**図 1-B**）から四十八枚田に映る「田毎の月」を張り付け、これに写生画（**図 1-E**）の「鏡台山」を強調して構図を縦長にして世に出したことは想像に難くなく、楢崎宗重氏によってかねてから指摘されている（『秘蔵浮世絵大観 1』解説）。**図 1-B** の長楽寺が崖の上にあるかのような不自然さは消えているのは、彼がすでに実際の風景を見ていたからであろう。画面の中央上方に月、左に鏡台山、右に姨石と長楽寺と観音堂の堂宇、右下に田毎の月が描かれた絵（**図 1-F・表紙**）は、

広重の頭の中にあった「模倣ルート」と「写生ルート」を融合した作品なのである。

むすび

本論考を閉じるにあたり、一言書き添えたい。広重に限らず、手本になる作品（「粉本（種本）」）が存在し、それと自らの写生を融合させて新たな作品を創作することは、美術史あるいは浮世絵史界では周知のことなのだろうが、しかし、「信濃更科田毎月鏡臺山」という特定の作品について、現地をしっかり踏査したうえで、ここまで成立過程を詳細に追跡できたのは初めてではあるまいか。さらにその過程で「冠着山（姨捨山）」と「鏡台山」が重ね合わされてしまったのではないかという私たちの説は、これまで提起されてこなかったようだ。

専門家ではない二人が大胆不敵にも本論考を世に問うのは、これ以上の探索は二人には難しく、この試論を専門家の更なる検討と吟味に任せたいと願ったからである。専門家の厳しいご批判とご指導をお待ちしたい。

最後になったが関連図書をご紹介いただいた、京都大学学術出版会の鈴木哲也編集長及び、本稿を読んでいただいた矢羽勝幸氏に深甚の感謝の意を表したい。

参考文献

小林秀雄他編『世界素描大系　Ⅳ』「東洋　スペイン　イギリス　アメリカ　現代」（講談社、1976 年）
楢崎宗重編著『秘蔵浮世絵大観　1　大英博物館Ⅰ』（講談社、1987）
矢羽勝幸著『姨捨山の文学』（信濃毎日新聞社、1988 年）
鈴木重三監修『広重六十余州名所図会』（岩波書店、1996 年）
千曲市文化財センター編集『姨捨の棚田ガイドブック』（ほおずき書房、2013 年）
千曲市教育委員会文化財センター編集『名勝「姨捨（田毎の月）」保存管理計画』（改訂版）（千曲市教育委員会、2014 年）
阿部美香著『歌川広重の声を聴く』（京都大学学術出版会、2018 年）

付録図版（これまで、解説がないものに限って、やや詳しく私見を述べた。）

A「信州更級郡姨捨山十三景圖」

（山岸哲蔵「篤垣眞葛校」この後刷「篤垣眞葛版」もある（玉城司蔵））

画面右に「カムリキ山　姨石　観音堂　桂木　宝池　長楽寺　ヲイ石　メイ石　小袋石　田毎　メイ石　雲井橋　更級川」を画面左に「鏡臺山　八幡宮　千曲川」を描く。碑は芭蕉、宗祇、真顔（篤垣真葛の師）と白翁（未詳）のみ。

篤垣真葛は通称竹内真助。後期の狂歌師で四方側の判者。江戸中橋油座に住む。安政４年（1857）閏５月２０日没。享年未詳。真葛は広重画の『狂歌鐘声百人』の板元でもあった。

B　「本朝名所信州更科田毎之月」

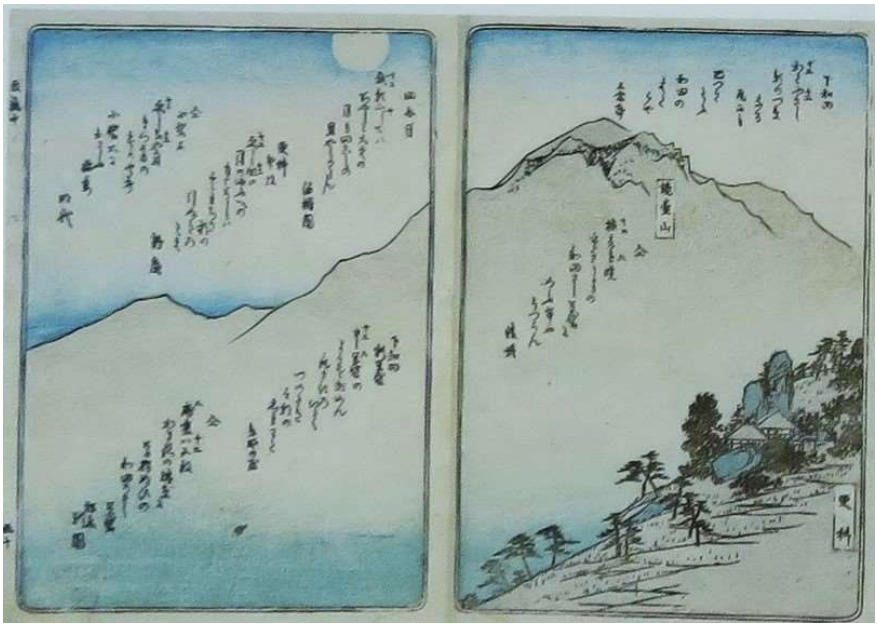
（立命館大学蔵デジタル資料に拠る）

https://ld.cultural.jp/snorql/?describe=https://jpsearch.go.jp/data/arc_nishikie-MFA_21_8928

C　広重スケッチ

（『秘蔵浮世絵大観』１所載　1987 刊）

D　『岐蘇名所図会』の挿絵



（『岐蘇名所図会』早稲田大学図書館デジタル資料に拠る）
https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he04/he04_05445/index.html

画面右には鏡台山と長楽寺周辺が描かれ、和田を詠んだ狂歌二首が描かれる。画面左には、「田毎月／我影にしてはあやしと大空の月も田ごとの月やみるらん　緑樹園」と「更科そば」を詠んだ狂歌二首、下和田を詠んだ狂歌二首を収載する。

E　広重　写生画

（『世界素描大系』Ⅳ　所載）

表紙：「信濃更科田毎月鏡臺山」（千曲市教育委員会蔵）

山岸哲：1939 年、長野県生まれ。鳥類学者。大阪市立大学名誉教授。
元京都大学教授。元山階鳥類研究所長。（長野県長野市檀田 2 丁目 23-23）
玉城司：1953 年、長野県生まれ。近世文学研究者。元清泉女学院大学教授。
信州古典研究所代表。（長野県長野市上駒沢 51-10）